



新年の御挨拶

梅本昌一

明けましておめでとうございます。寒さ厳しい中により新年をお迎えのことと存じます。

昨年は私達の念願しておりました「林業種苗法」が成立し、いよいよ今年2月から実施されることになりました。この法律のネライは結局「由来のはっきりした優良苗木を適地に植える」ことにありますが、この法律を有名無実のザル法にしないように大いに関心をもち努力して行かなければなりません。

どうも我々日本人は古来から外国文化を輸入吸収して発展して来たせいか、新しいものにはすぐとびつぐが、古くなると見向きもしなくなるという浮気心が強いようです。林木育種が言いだされた昭和32年頃は国有林の生産力増強計画が進められておった時でもあり、木材増産の魔法でも発見したようにもてはやされたのですが、いつの間

にか忘れられてしまったのです。

ヒノキ材が高くなると造林はヒノキ、小丸太の値がよいと密植、更には材価が低迷すると造林はやめたという。これでは長期間ネバラなければならぬ林業ではたまったものでありません。どうか皆さんは一時の流行や短期の経済変動に一喜一憂することなくじっくり構えていただきたいと思います。

林木育種事業も種苗の生産の増加に加えて林業種苗法の施行と、いよいよ出番となった感じがですが、我々育種担当者も喜んでばかりいないで、更に一段とピッチをあげ成果の向上に努力しなければいけないと覚悟を新たにしております。

今年もまた一層のご支援とご協力をお願いして新年のご挨拶とします。

(東北林木育種場長)

新春をむかえて

水田輝弥

明けましておめでとうございます。奥羽支場で初めて迎えた新年にあたり、所感の一端をのべて意を新たにしたいと思います。

私は役所に勤務して以来、北海道や長野で毎年雪とともに元旦を迎えてまいりました。

東京に勤務した最近の四年間もかかさず暮から山へ出かけ、やはり雪のなかで元旦を迎えました。今年は居ながらにして雪の正月を過ごすことができます。リンとした寒さと純白の雪がなければ、新年の感じがピタリとこないような気がします。

寒さと雪といえば、林木の抵抗性育種が民有林では昨年からはじめられ、国有林でも一足おくれで今年から着手されるようです。奥羽支場ではスギの雪害を中心としてとりくむことになりましょう。

従来からやっている成長量と品質の改良を目的とした育種に、新たに加わる事業ですから、林木育種事業の歴史にとって重要な一頁にあたる年といえましょう。

育種事業は地味な仕事で長い年数がかかること

は宿命ですが、貴重な月日を無駄に費やすことは許されません。着実に推進することが必要かと思えます。そのためには、やれカラマツだ、それコバハンノキだといったその時々の動きに影響されることなく、定めた目標にむかって自信をもって邁進すべきだと考えています。

また、育種事業の将来の成果を担当者自身が過大評価することには問題があります。第三者に無

用の期待感をもたせ、やがてそれが育種事業そのものに無用の非難となってふりかかってくるかも知れません。どんな仕事にも限界があります。逆に周囲から過小評価されてもさほど気にすることはないと思います。着実な努力の成果がやがてそれを洗い流してくれるでしょう。静かな勇気をもって進みたいと考えています。

(奥羽支場長)

◇◇ 林木育種を語る ◇◇ 座談会

あけましておめでとうございます。

林木育種事業が国の施策としてうちだされてから、早いもので1971年を迎え足かけ15年になります。この間わが国の経済成長はめざましい発展を遂げたが、その反面巷には公害問題が山積され、国民の自然に対する関心、特に緑や水についての輿論が今日ほど大きくとり上げられている時代はないでしょう。

このような経済、社会の急激な進歩にかかわらず、わが林木育種は永年性作物の宿命といましようか、一步一步前進はしておりますが、飛躍的な発展は遂げていない。従つてもともと一般に関心のうすかった林木育種事業が益々世間から遠ざかっていきはしないだろうか、その反面林業の実際家からは育種場は何をやっているのか、早くすばらしい植栽材料を生産(創出)せよと迫られるような感じをもっております。

一般の人々に対してはPRを、実際家には納得のいくものをしめすこと、また育種の職場同志については的確な情報交換が急務と考えております。この新春にあたって場長に司会をお願いして、林木育種全般について職員

の皆さんに大いに語ってもらいたいと願っております。

司会 今日テーマを三つ位にしぼって話を進めたい。司会者からの指名でなく参加している皆さんが自由に発言して、新春にふさわしい座談会にしたいと思っております。それからここでは問題に対して白黒の結論を出すというような形でなく、相手の意見に反対なら反対でも結構だから、むしろ相手の意見にさらに自分の意見を積極的に積み重ねていくという具合に話をしてもらいたい。

話の順序として、育種事業の現状、今後のすすめ方、遠い未来に分けて進行させたい。

採種圃園の設定は県の場合は昨年度で完了し、まず第1段階が終わった形だが、一方国有林はいろいろの事情はあったにせよ現状は県に比較して若干おくれている。

両機関の採種圃園の現場の実態からこうあるべきだ

とか、そのためには育種場としてこういう事をしていかねばならないのではないかな等について話を出してもらいたい。

柴田 それでは現状について私から説明します。タネや穂の生産状況をみますと、アカマツは数年前からタネの生産が始まり、宮城県などでは県有林分をまかなってなお民間に売っております。他の県、局でも順調にのび45年度はかなりのタネがとれたようです。

スギの採種圃園もジベレリンを使ったタネが出はじめ、宮城県では県有林分のタネが全部採種圃園産のものであり、よそでもジベレリンを使い始めたので早晚事業的な規模でタネがとれることでしょう。採種圃園は着手が早かったわりに発根が思わしくなく意外におくれたが、一応発根率のよいものだけで再編成しようとして進めております。しかし発根のよい数クローンは数年前から一般造林用で使用されております。

カラマツは現在やっと含花が付き始めた段階なのでもう少し時間が必要でしょう。

次に現場の状況ですが、主として国有林になるんですが、設定した所を見ますと、従来からも問題になっているが、造ったけれどその後の育成管理の面でまだまだお粗末な点が見うけられる。営林局と協同して採種圃園の育成管理の手順書をつくって活用してもらおうようにしているのですが、その手順書がよく理解されていないか、理解されても上部の認識によって経費が十分つかない、経費があっても担当区、苗畑主任という立場から自分の本務に勢力が集中して、育種の仕事にはあまり手がまわらないという感じもうける。

この間2、3の採種圃園を見たが、一応植えてはあるけれど、その後の施肥、地表管理のまずさから造林地の苗木と同じ状況なんです。手順書にあることを実行してもらうことは私達の理想なんです、現在の国有林の実体、営林署の実情を考えますとあのとおりのことはできないだろうという気がします。しからば手順書に対しどのへんまでやればよいかということ、現

場にあわせて助言していくのが育種場の務めではなからうかという感じを受けております。

太田 そのとおりだと思うんですが、これは我々自体にも問題があろうとも思います。我々は一応採種圃園の育成管理についていろいろ調査をつづけていますが、判らない点が多い。こうやればこうだという結論を出せない事が沢山のこっている。また一方では今日までに判ったことが現場で活用されていないことも多い。最終的にはこうあらねばならないという見通しを早く育種場自体がもたなければならぬ。

柴田 育種場で過去2、3回研修を行なっているが、研修を受けた人がその場に長くおれないことも一つの欠点だ、半年位で別の部門の仕事をしている、従って習得した技術が現場に還元されていない。

太田 手順書に書かれていることをよく理解してうまく現場に活用していくことはなかなか至難なことで、現物で実際に指導することが大切だ。研修を受けた人が他の面に転任することも組織上ありうることで、研修を毎年やって造林部門の仕事にタッチする人に育種事業を身をもって覚えてもらうことが大切ではないだろうか。

高橋 育種事業が始まった最初の2、3年は県、国有林に対し育種場が主体になって仕事を進めたが、10年も経過したのだからできる事は、自主的にどんどん進めていくという意識をもたなければいけないと思います。育種場から行った時だけハイハイといわれては期待どおり軌道には乗れないと思う。また事業分量から言って育種事業は微々たるものでしょうから、これに全力投球できないという感じにも受けとめております。

太田 それはやむを得ないでしょう。

要は、早くもを出して精英樹の苗木で山を造ることが先決であり、しかも、それを皆なが見てなるほどと思う答でなければ全力投球はできないだろうと思いますが、それまでには、九州の山の例から見ても明らかのように、長い目で見てもらうことが必要でしょう。

佐々木 私今回見てきたんですが、うまくいっていない所の原因はさき程から発言がありました認識不足、予算の配慮、それに採種圃園に植えられた苗木の中には不良苗木もあったのではないかと思います。種苗事業の場合事業量やコストから言って実生の方が今のところ生産原価が安く且つ手なれている等で、その方面に傾注していたむきもあり、さし木の基盤となる採種圃園の育成管理がおろそかになったふしもあるようです。そのことは技術面で自信がなくて消極的な手の入れ方をしていたことも大いにあるでしょうが、やはり、今後は全面的に育種苗で造林をし国有林の収益をあげていくんだと言う気がまえが欲しいですね。それと見込みがないと思われる採種圃園はこの際思い切って植えか

えした方が毎年補植をつづけるより早道と思います。

それからもう一つは国有林だけでなく、県に対するアドバイザーとしての育種場の立場から考えますと、気候等環境条件が当地方よりよい個所は生育もよく事業も進んでいるので、私達が未だ実際にマスターしていないことも推定で指導しなければならないこともあり、それらをカバーするため試験地の一部を気候のよい南にもって行ってその成果をもとにしてアドバイザーするようにしなければ国の育種場としての使命が少し欠ける点があると思うんですが。

高橋 話しは少し違いますが39、40年にスギが寒さで大被害を受けた時、南にスギをもっていったらと言う話もありましたが、手元に材料をおいて日常観察調査しなければとか、ここにはスギがありませんでは育種場としての価値がうすれる等の意見で現状を再整備することにしたんです。ものによっては県の方が進んでいることもあるでしょうね。

司会 いろいろ意見や話がでたが、青森局ばかりでなく国有林全般について同じ林野のもとにあるということで育種場でやってくれとか、依存する気持ちがでてくるね。

それから現場で実際育種の仕事をやっていた人がかわることはやむを得ないと思うので、我々は通りいっぺんでなく根気よく助言していくことだろうね。ある程度の規模をもっている採種圃園は、それ相当の人もおき経費も相当かけてやっているとと思うけれど、面積の少ない個所、不便な所で片手間にやっている場所が問題だろうね。

私は人間が物事をはじめる時は威勢がいいんだが、時と共に最初のカケ声はどうしてもうすれてくるんで、このあたりを考えると私は楽観視しているんだが、皆んなの話は悲観的なことが多かったがもうそろそろよくなると思う。

やはりある程度年月がたたないとあせってもなんともならない。現に仙台習のアカマツはタネがなってそれを使用しているし、2～3年もすれば方々の採種圃もタネがどんどんでるし、研修をうけた人もいるんだしうまくいくと思う。

川村 育種とはバンパークではないが百万ドルの火をもやす覚悟も必要だと思いますが、そして最良のもののはじめて出ることではないでしょうか。

渡辺 出発の時はやはりブームだったんだな、それでぐっと燃えあがったけれど、ほんの一部の人以外は本当に育種の必要性の認識に立ったのではないので、今になって下火になったが、やはりタネ、穂が出てはじめて成程と思われるのでものを出すことだろうね。それから、さかのぼって考えると採種圃園の用地選定のあやまちというか吟味がたりなかった。もう一つは手順

片がよく利用されていない。現場に行って聞くと一回も見たことのないという人もいる。また署の幹部の育種に対する認識が非常に低いこと、だからそういう面からも経費の問題も出る。また我々の側からは我々の勉強不足も多分に影響している。こうすればこうなると言うところの技術なり理論をもって現場を指導していかなければ、現場の人に信用されないし、引いては育種場に対する不信を抱かせることになる。その為には我々ももっと勉強しなければならぬし、研修も毎年くり返してやっていく必要もある。作業をするのは作業員であるが仕事をさせるのは上の人達なので主任の研修も必要であり、主任に経費をつぎこむ課長の研修も必要だし、なぜ育種をやり採種圃園に金をつぎこまなければならないかという認識を署長にももってもらわねばならないんで、ドの人だけの研修でなく、たえずあらゆる階層の研修が必要だと思う。

司会 次に近い将来のことに話をうつしたい。余談になるかも知れんが、この間耐雪性の選抜の事で新庄(秋田局)に行ったんだが、話によれば国有林で明治、大正、昭和と3回同じ失敗をくりかえし、同じところにまだ造林をやっている――

日本の林業はまだ定着していないが、ドイツでは1回大失敗して、今のような施業体系になってその後は全然失敗していない。歴史的にみますと中国、中近東は林業政策の大失敗がくりかえされ、中近東では人も住めなくなった地域がたくさんで、中国では大洪水がくり返され水を治むる者は国を治むとまでも言われた。結局木を切り過ぎたため、なかなか再生というか回復ということは至難な業である。

我が国の場合はそう大きい失敗がなかったので、割合森林の有難さというものがわかっていない気がする。そのへんから育種の進め方も外国とちがうという気がする。

先ず抵抗性育種の問題だが、その中の耐雪性について極端なことを言うと、耐雪性のスギというものがあるだろうかと疑問をもつ。耐雪性という遺伝因子があるだろうか、どういう表現形があらわれ、それが雪に対する抵抗性になるのだろうか。

佐々木 耐寒性、耐雪性というものは絶対的なものではないと認識して仕事にかかる必要があるのではないだろうか。

司会 抵抗性育種の進め方というのは世界でもわからないんで、当然日本でもわからない。従って進行過程での誤りはある程度しようがない

失敗を心配すれば仕事にならないし、いろいろ悪い条件やまちがいを正しながら反復を重ね基礎を固めていくことだろう。

林業は公害等という時代の流れに対しては十分考え対

策を講じていかなければならないが、流行を追いかけたいはいけないんだね。

太田 耐寒性、耐雪性や耐病性等という抵抗性育種は絶対的なものかどうかよく判らないが、期待しながら進めざるを得ないと思う。ただ問題は現在の収穫方法が原因して寒さの被害が多発していることは確かなことで、それらの解決を育種の面だけにしわよせされるのはおかしいので、総合的な育林技術と相まって被害の防止をしていかなければいけない。それに一般には育種で選ばれたあるいは創出されたものは絶対的なものだと思われすぎる心配がある。

佐々木 今収穫のやり方が諸被害招来の原因だという意見が出ましたが、私も同感だなあ、去年東大の北海道沢村林を見せてもらったんですが、本当に森林を守りながら且つ生産をあげていくというキメの細かい施業なんですね。国有林でも軌道修正をする必要があると思うんですが。

司会 民有林ではそのような施業をやっているところもあるんだが、国有林の場合実際は無理ではないだろうか。多少はとり入れられても、ずう体が大きすぎて小回りがきかない。試験とか実験的にはそのような施業はできるけれども、継続して一定の事業量を毎年やってきているので、大学あたりは違いますからね、多少修正する余地はあると思うが、大学の山のようにとは無理だと思う。

渡辺 耐寒性、耐病性と口では簡単に言うけれど、実際は非常にむずかしいと思う。今急に言われても材料もなにもないんだ、技術屋が設計して工場でものを生産するような訳にいかないんだなあ。林業全般の将来の動向を推定してそれに見合う材料を集めておくことが非常に大事だね、そして育種場は要求に応じた材料を提出するようにならなければいけない。

今問題の耐寒性にしても材料あつめからはじめて、将来何年で解決できるかというところ見通しがたたないし、遺伝的なものがあるかどうか今後の問題だね。我々がこんなことを言うのはいいのがれに聞こえるかも知れんが、まず当分育林技術でカバーしてもらいたい。手近な例は小岩井農場の山ですよ、樹下植栽や二段林にしたりして立派にスギを育てているんだから、育種によつた材料が出るまでは100%の効果はないかも知れないが、早道である育林技術を駆使してもらいたいね。

ブドウやクリの例もあるが、それが大丈夫だ、いいものだと実地に使用されるまでは長年月かかっているんですよ、育種場というのはさっきもいったが目標に応じた材料を広くあつめて、品種系統を正しく管理し、それを増殖して出しやるのが本命なんだね、世間一般ではAからZを出すことのみが育種場の使命と思っ

ておるようだがね。とにかくものをつくり出すにはそれに応じた材料が必要だということを十分認識してもらわねばならないことだ。

試験場がカラマツ落葉病の遺伝的解明を育種場との共同研究でとりあげたけれど、先輩や保護の人達がたまたま育種場にその材料を保存してあったからできたんで、机上ではいくら考えてもできないんですよ。

齋藤 今言われたように育種をやっている限りずっと材料を集めなければならぬと思う。高海拔地帯で成林しているスギが遺伝的に耐寒性としてどの程度の価値あるものかよく判らないが、常識的には寒さに耐えて成林したと思うので高海拔地帯のスギを集めて増殖し、急いで検定することが必要なんではないでしょうか。

渡辺 それは考えてもいいことだし、当然そうあるべきだと思うんですよ。

齋藤 耐寒性の場合高海拔地帯のスギの選抜を急ぐべきだと思いますがね。

渡辺 今の精英樹は特別に耐寒性を考慮して選出していないからね、割合に高いところから選出されている個体をチェックしてみたら、ただ高海拔だから耐寒性があるかどうかは問題だね。

柴田 今やっている耐寒性候補木の中には既選抜の精英樹でここで事業的に寒さに対し強かったものが入っていますよ。

渡辺 育種場ではかつて黒石の苗平とか雫石の国見から選んで植えているわけですよ。

齋藤 だからそれを植えておくだけでなく、多く殖やして検定してみることでと思いますね。

渡辺 それは必要だね。

佐々木 高海拔というのはあまりにも抽象的な表現であって、今私達が言っている耐寒性とは必ずしも結びつかないような気がします。

6～7年前に青森局では拡大造林の一環として所謂高海拔地帯のスギを土台に採穂園を造成する計画で選抜したんです。その時育種場も協力して選抜と増殖に当たったんですが、私も1、2カ所に出かけました。例えば岩手山ですね、あそこは650 m位の場所ですが成程立派なスギが神社の附近に10数本あるんですが、環境が非常にいいですね。植栽当時の取扱い方はよく判りませんが、小面積ですが昔の人は先見の明がありましたね。

駒岳のスギあそこは1,000 m以上ですね、成長は余りよくありませんし環境もよくない。しかしあそこは積雪3～4 mはあるでしょうから、10年位は雪の中に入っているんで乾燥を含む寒害からは守られて来たという印象を受けますね。

これらの材料で増殖したんですが、さし木は発根が

まずく、つぎ木のものが場内に植えられ、一部は平石の採穂園に入っています。

場内のものはあのとおりの寒害に対し思った程強くない。それで本格的な増殖に入れなかったんですね。

高橋 それに局も造林課長が交替したりでね。

渡辺 高い所のもの必ずしも強いかというとそうでもない。ただすべてがそうでもないからやってみて選択を加えていく必要があるね。

柴田 不可能を可能にすることはできないが、現在ある材料より一歩進んだ材料を生み出すことは育種で可能であろう。今の抵抗性の問題にしても、例えば1,000 mから選抜して確かに耐寒性があるんだとはっきりした場合、またいきなり1,000 mの所に返すという使い方ではなく、従来の材料を使っても800 mの所でも一応成林はするが、造林初期に寒害や凍害が発生し、成林にいたる期間が長くなるというような所に使うことによって生産量の向上が可能でないかと考えます。又ある期間を経ればすばらしい材料も出るかも知れませんが、じょじょに造林地を拡大する方向に進むべきだと思います。

渡辺 ねらいはそういう所にもありますね。

今より多少高い所で在来のものより被害が少なく成長がよい、一歩前進になりますからね。

柴田 現在の造林地を今後どれ程拡大できるかという問題ですね、造林地さえ大きくなれば林野面積が2,500万haあるんですから、生産量の向上は期待できることになる。現在800万haぐらいですか、それを将来1,400万haぐらいに拡大したいというけれど、それはマユツバだと思いますね。まあ1,000万haぐらいに拡大することができるとすれば、10m²で造林地だけで1億m²ぐらいです、そのへんはどんなものでしょう。

司会 不可能でしょう。平均して6～7m²になればオンの字だろう。今は1,300万haを日本全体で目標にしているけれど、国有林は330万ha、だいぶ修正しているからいいところだと思うんですよ。残りが970万ha、ちょっと無理ではないかなあ、770万ha以下だろうね。しかもその中では10m²の成長は一部で、ならして6m²位でないだろうか。

だから日本で木材を自給しようとしても今の需用から考えれば無理だろうね。

柴田 そのへんが育種に課せられた大いなる期待とゆうんです。

司会 育種に期待することは大いに結構なことだ。我々の努力もそこにあるんだが、ただ育種オンリーの認識は改めてもらわねばならない。やはり育林技術と相まってよりよい効果を上げることだ。耐寒性育種と造林についてはまだまだ話がつきそうもないが、このへんで次の育種の未来について夢のような話でもよいから出

してもらいたい。

今は遺伝子そのものはよく解っていない。しかし遺伝子のDNA(デオキシリボ核酸)の解明も次第に進んでいるので遺伝についての暗号もある程度読みとれる時代もそう遠くないんじゃないかと思っておるがね。

柴田 東大医学部の渥美教授が例の遺伝子合成について、そのうちに人間改造ができる時代になるかもわからない。と、かいたのを読んだ。林木の遺伝子についてもその役割が解明できれば、これは耐寒性の遺伝子だからとポイッ!と、とり入れる。ああこれは悪い遺伝子だから捨てちゃえというような時代も来ると思うんですがね。

渡辺 こういうテンポの早い世の中ですからそう遠くないと思うね。

この間の会議に北海道から材質育種の問題が出ましたね、私はこれに対して、結構だけれど急にやっても出来っこないんで、それはそれとして進めておいて、今は現在進めている量を重点に進めるべきだ。木材を利用する面での技術開発の方が早いからね。秋田の天スギのような目のこまかいものを使用するのは一部の特殊階級の人達で、これだって合板技術の進歩で本物と見わけのつかないものが数多くつかわれているからね。我々が20年30年かかってそういう木をつくりあげる前に利用方面での技術が解決してくれるのが早いね。しかし、材質育種や交雑育種などやらないということではないので誤解のないように、要するに言いたいことは流行にまどわされないでじっくりとやることだ。

司会 案外夢みたいな事が現実になるんだね。例えば僕らが30年前に、丸太のままでもよいとか悪いと言わないで、みな粉にしちゃってセメントみたいだね、今、ハードボードがでてきた。昔一ぱい飲みながら馬鹿みたいな話をしたことが実現してくるんだね。放射線のものから案外でてくるんじゃないか。

高橋 2カ月位まえに新聞でみたんですが、平塚の農研では試験管ライスや試験管キャベツが作られている。普通我々はタネをまいて植物を育てる、ところが試験管の中でオンベを培養して苗をつくり、それを植木鉢で育てたもので、専門家たちは薬培養と呼ぶ最新の育種技術である。このオンベ培養は人間にたとえれば、子供は母から生れるという常識を破って、父からできるということを示している。

要するにオンベだけで植物体をつくれればその染色体の数は普通の半分であり、遺伝子の組み合わせもぐっと減る。だからねらった品種がズバリとつくれる、これまで品種改良に10年以上もかかっていたものが大幅に短縮できる、という意味でしたが、林木の方でもこれに似たようなことをやっているでしょうね。

渡辺 林試本場ではハンノキを材料にしてこのような研究をしている。またX線をつかってスギやマツなどの双子をさがしている。基礎研究というものは、夢を実現させるカギ的な役目を司るものだから大いにやってもらいたいね。

司会 育種の基礎研究は林試本場、応用研究と実行は育種場という形で進めているが組織上縦のつながりががないだね、将来の展望にたった場合果たしてこのままでよいか考えるね。

皆んなの夢を大いに語ってもらうつもりでおったが時間の関係でこのへんで終わりたい。

世論を聞くことはよいが、まどわされることなく場員一致して本年も頑張ってもらいたい。

(文責編集委員)

編 集 後 記

読者の皆様にはよい正月を迎えられ、心からお喜び申し上げます。

今年も本紙発行についてよろしく、ご支援、ご協力をお願い致します。

育種事業も精英樹選抜にはじまり、増殖、配布、採種穂圃の造成、次代検定林の設定、抵抗性育種とテンポは遅いが着実に歩みをつづけ、育種タネや苗木が生産されはじめております。しかし、さし木の発根、採種穂圃の技術体系の確立等、まだまだ問題は沢山残っておりますし、今後についても新しい問題が屏風のように立ちふさがっております。

技術革新時代の昨今ですが、急に解決出来なくとも絡んだ糸をほごすように、ていねいに解いていきたいと、場員一同決意を新にしております。

さて本号は今までと少し趣きをかえて、場職員の座談会を記事にしてみました。紙数の関係でその全容を掲載することが出来ませんで、発言者ならびに読者にお詫び致します。

毎年この欄で読者各位にご寄稿をお願い致しておりますが、皆様ご自身の「東北の林木育種」とお考えいただき、本紙を育てていくため、研究論文調にこだわらず、林木育種について日頃考えておられること、感じていること、育種場に対する注文、アイデア、育種事業の悩み等、現地の声を記事にして、本紙の巾を広げていきたいと考えていますので、皆様のご寄稿を心からお願い致します。

昭和46年1月1日発行

編 集 東 北 林 木 育 種 場
岩 手 県 岩 手 郡 滝 沢 村 滝 沢
T E L 019688(滝沢駅前局)—4517

印刷所 杜 陵 印 刷